

伊野川から忠別川までの地名②

ホトウイエウシとノチウ

知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」のオサラッペ川の地名解の冒頭に、掲載地図のホトウイエウシの地名解を書いている。

ホトウイエウシ(hotuye-us-i 叫びつけている・所↓いつもそこで呼ぶ所)→オサラッペ川の川口左手の崖の上は、江丹別の方から峰伝いに出てきた人が、そこへ立って大声をあげて、対岸の部落から舟を呼ぶ場所だった。

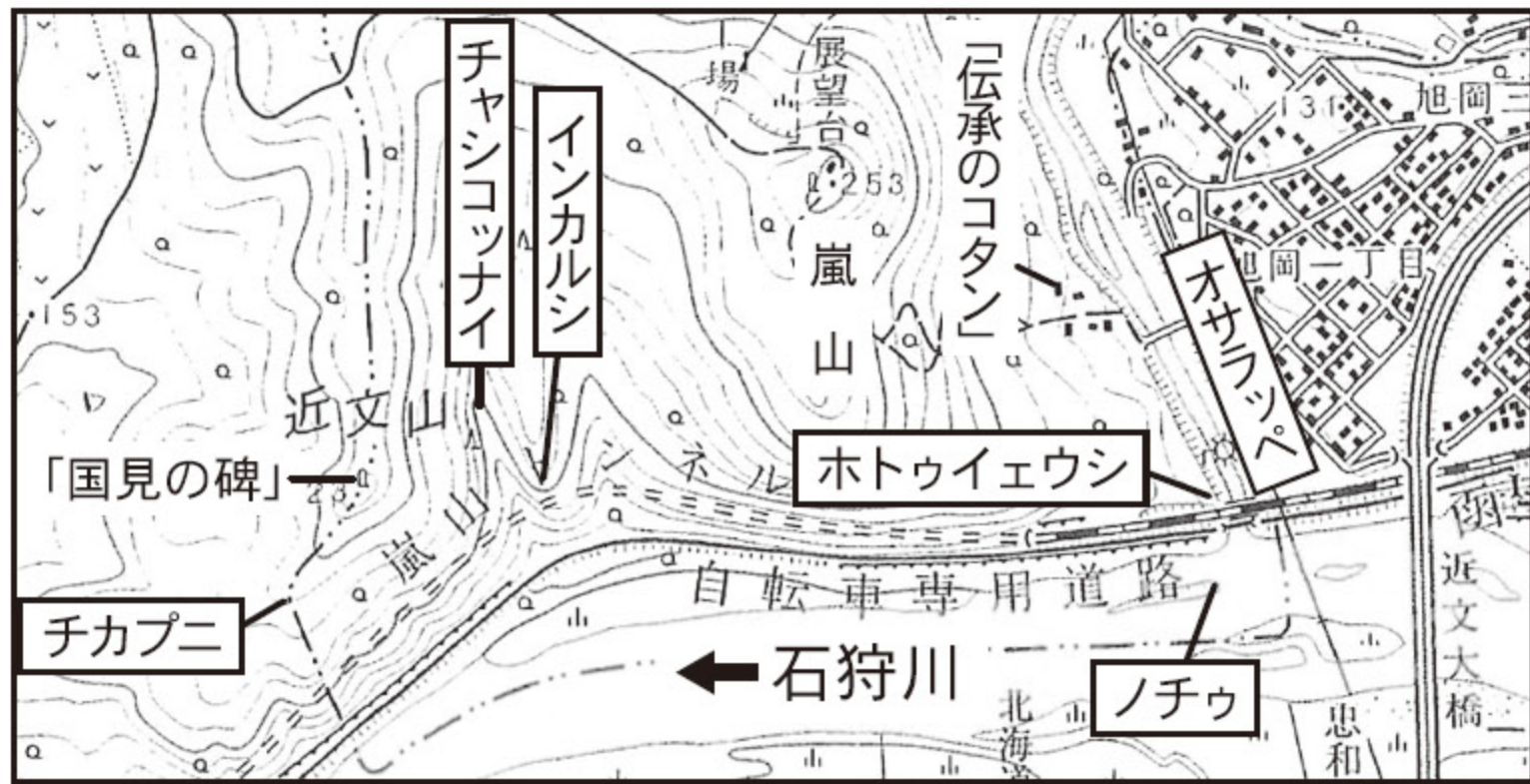
コタンの生活に密着した、丸木府時代の珍しいアイヌ語地名である。

その一方で、この場所には、チャシがあつて、「嵐山遺跡」として、昭和四十二年には、国鉄函館本線の複線化工事のために大規模な発掘が行われた。この

「嵐山遺跡」からは、五つの時期の資料が出土している。最も古いのは、先土器時代のもので、次が貝殻文土器の時期であり、三番目は出土量が最も多かった縄文中期のもので、次が縄文晩期のもの、最も新しいのが、擦文時代のものであった。

また、この「嵐山遺跡」から、当連載⑫で紹介した、動物の魂を神の国へ送り返す、「送り場」として、ヒグマ一頭と、エゾノウサギ十三頭を送った遺構が見されている。

さて、写真①は、「嵐山遺跡」の昭和四十三年発行の報告書のもので、「弓成山展望台より遺跡全景」と説明がある。右

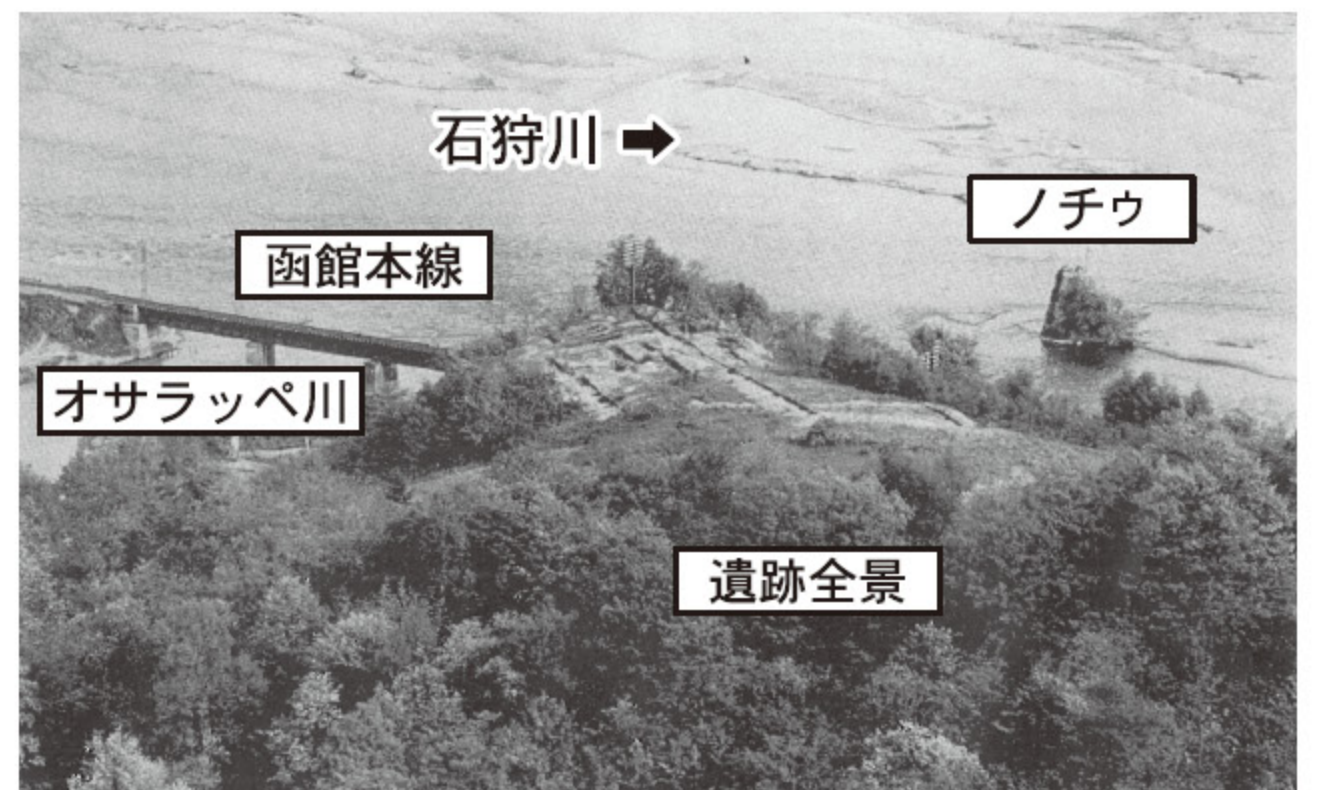


中央に、石狩川の中に孤立した大きな岩が見える。これが伝説の岩の「ノチウ」である。写真②は、安政

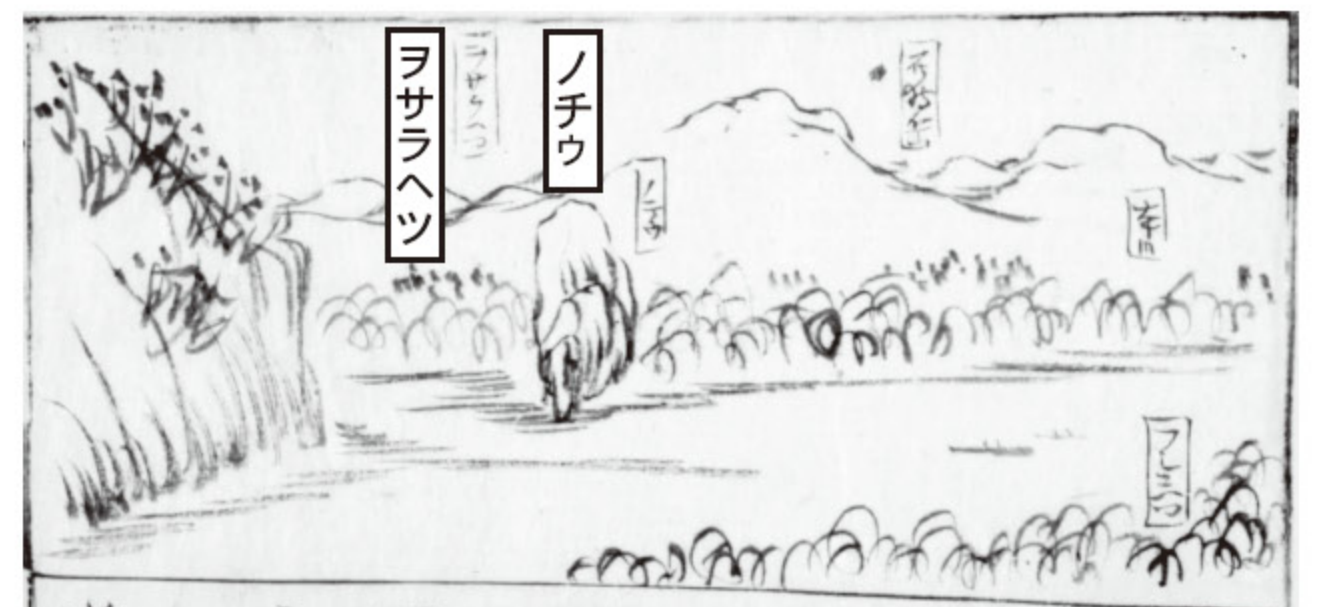
四年(一八五七年)に、松浦武四郎が報文日誌の「再篙石狩日誌」に描いた「ノチウ」の絵である。本文では、「サルブツ(註→オサラッペ川)川口幅十五六間、前に一ツの岩有り、其の風景よろし」と記し、一ツの岩が「ノチウ(星)」であり、それは陸続きにあって、この岩の下流にオサラッペ川の川口があったことが判名する。

また、明治二十一年九月二十三日、第二代北海道庁長官の永山武四郎の上川巡検に同行した『北海道毎日新聞』記者の野中掬泉は、一行の近文山および半面山登頂の帰途、忠別太の宿泊所へ向かう時に、わざわざ丸木舟から下りて、この「ノチウ(星)」を見学し、次のように記録している。

(近文)山より下り、刳舟に乗じて川を上り、嵐山の麓を過ぎ、字オシヤラツペ(註→オサラッペ川)に至る。此処河畔密林の中、一大巖あり。アイヌ之れを隕星石と称して尊崇すと。余之を聞き、舟を止め、直に(阿部宇之八)社長と共に岸に上り、舟子アイヌを嚮導とし、荊棘を排して林中に入る。巨巖あり。林樹深き所に直立す。其高さ大約丈(約三・〇三)余



写真① 遺跡全景



写真② ノチウ

就て之を見る。赤色にして白斑あり。其質近傍山岳及び河中にあるものと異ならず、唯砂州樹林の中に孤立し、其形状大に風致あるのみ。アイヌに隕石の由来を問ふも、唯口碑に伝ふると答ふるのみ。是れ亦た神居古潭の類なるか。再び船を棹して上る。夕陽、面に映ずるや、亦忽ち背を照す。以て石狩河流の曲折するを知るべし。

野中掬泉は、「ノチウ(星)」は、写真①と全く異なり、「林樹深き所に直立す。」と述べている。写真①は、松浦武四郎の絵とも全く異なる。この点から、今回は「ノチウ(星)」とオサラッペ川について見ていきたい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

131

高橋 基